

Eureka XI

六年制通信 No.34 令和6年2月2日(金)号

幸福の前に置くもの

おそらくヘシオドスの『仕事と日』ではなかったと思いますが、「神は幸福の前に汗を置いた」という言葉があります。ヘシオドスは古代ギリシアの吟遊詩人ですが、ホメロスが有名すぎて、あまり一般には知られていないようです。岩波文庫に松平千秋の名訳『仕事と日』が入っていますから、一度手に取ってみて下さい。

幸福の前に置かれた汗とは労働のことでしょうが、キリスト教には労働は罰であるという思想があります。旧約聖書の創世記を読めば、禁断の果実を食べたアダムとイブ（詳しく言うと、蛇にそそのかされて林檎を食べたイブがアダムをそそのかして食べさせたわけ。イブ恐るべしです。アダムを巻き添えにするわけですからね。こわっ）に与えられた罰として「今後は額に汗して食を得よ」と書いてあります。しかし紀元前700年頃の詩人は「労働は全ての善の源」と言っていますから、労働は尊いものととらえているようです。ですから「幸福の前に汗を置いた」というのは、何か罰則のようなものではなく単に労働の後には幸福が来る、つまり働く和幸福を感じるということではないかと思えます。民族によって、時代によって、もちろん労働にもたくさんの種類がありますから一概には言えないのですが、労働というものをどのように考えてきたのかを調べてみるのも面白いかもしれませんね。「探究」でやってみてはいかがでしょうか。

働く和幸福を感じるというのは一面真理でしょうが、幸福を感じない労働もあります。これは以前も紹介しましたが、同じ汗でも何も生み出さない汗は人を最も苦しめる刑罰になる、そうドストエフスキーが言っています。刑務所の囚人が最も音を上げるのはどんな作業を命じられたときか。それは何の意味もない作業だそうです。それを毎日繰り返させるとどんな囚人でも精神的に弱っていく。例えば、砂の山を違う場所に移動させ次の日は元に戻させる。それを延々と繰り返す。想像すると、確かに肉体的な苦痛以上に精神的に堪えそうですよね。自分の汗が何も生み出さないことに人間は耐えられないものらしい。つまり、幸福の前に置くべき汗はどんな汗でもいいわけではなく、何か意義のあるものでなければならないということです。教会の建築に関わっている人なら、自分の労働によって美しい建物が着実に出来上がっていくのを見ることができます。しかもそれが何世紀にもわたって存在するわけですから、自分の汗に大きな意義を見つけることができます。教育に携わる人もそうだと思います。子どもが教育によってさまざまな知識を得て、立派な若者になっていく姿を見ることができるわけですからね。どうやら汗には有意義な汗と無意味な汗があって、幸福の前に置かれるべきは有意義な汗であるべきだと言えそうです。

さて、もう一つ、労働は一人で行う方がいいのか複数で行う方がいいのか、どちらの方が幸福になれるのかという視点があります。これは、しかし、労働の質によって全く違うでしょうから一概には言えないと思います。作家など、そもそも孤独な労働がありますし、先に挙げた建築など一人ではできないものもありますから。ただ、一人か皆かということで言えば「はやく行きたければ一人で行け。遠くへ行きたければ皆で行け」という諺があって、様々な場面で引用されているようですね。この諺は、いつどんな場面で接するかによって解釈も変わってきそうです。それは当たり前で、「はやく」行かなければならない場合もあれば、「遠く」へ行く必要のある時もあるからです。これ、今の君たちに当てはめるとどうなるのでしょうかね。若者は「はやく」と「遠く」とどちらを意識すべきだと思いますか。もちろん、はやく遠くへ行ければそれが一番でしょうが、どちらを大事に考えるかと言えば、私は「遠く」だと思います。なぜか、一人でできることは難しくないからです。一人で決めて一人で実行できることは、たとえどんな結果になってもその人がそれで幸せだと思えばいいだけの話です。この諺は、一人で遠くに行くのは難しいということを言っているのです。いつも言うように「一人では到達できない領域に達するには、皆で行くしかない」というわけですね。「受験は団体戦」というのも同じことです。一人では遠くへ行けない、ことほどさように人間とは弱いものだ、私にはそう言っている諺に思えます。

今週のおすすめ

・ 柚月裕子 『風に立つ』 (中央公論新社)

補導委託という制度があるのですね。非行少年の更生を手助けするために自分の家に預かるわけですが、南部鉄器の職人の孝雄は仕事一筋、四十前の自分の子ども悟には子どもに愛情を持たない冷たい父親と思われているが、家族に相談もなく補導委託を引き受けるところから物語が始まります。悟は自分の子すら愛せない男が他人の子を面倒みられるわけがないと反対しますが、職人は頑固と相場が決まっていますからね。春斗という中学生を預かることになります。還暦を迎えた職人で一本気の健司、たまにふらっと現れてアルバイトをしては去っていく八重樫という青年。彼らとの触れ合いと、ある祭りを通して春斗の心に自分の目指したいものが生まれてくる。と、その矢先、母親が突然春斗を迎えに来る。春斗が約束を破ったからだという。反発する春斗。さて、春斗の両親は何をを考えているのか。孝雄や悟はどうするのか。

柚月さんはミステリー、そう思い込んではいけаниいのですね。この本は家族の物語です。語られることのなかった孝雄の人生を知って、悟の心も変わっていく。また、春斗の両親の心も変化していく。ラストの悟の決断は頼もしいですね。

ちなみに文中、ちゃんと生きるの「ちゃんと」とはどういうことか、について孝雄が話す箇所があります。「ちゃんと、とは、人の道に背くようなことをせず、人に迷惑をかけず、なにかに怒ったり、誰かを憎んだり、深い悲しみに暮れるときがあっても、自分の力で少しでも健やかに生きようとする」ことだ、そう孝雄は話します。賛成だね。

BGMは Adele の *Easy On Me* でした…。